HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	酪農学園大学の歴史と大学開放の実践
Author(s)	石山, 貴士
Citation	高等継続教育研究, 3, 78-83
Issue Date	2004-03-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51891
Type	departmental bulletin paper
File Information	Ishiyama-3-11.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第 2 部

札幌地域の大学調査報告

第 1 章　　酪農学園大学の歴史と大学開放の実践

石山　貴士

本稿では酪農学園大学の創始者である黒澤酉蔵の人物史と同大学の前史、戦後酪農学園大学の変遷にみる特徴、大学開放の実践として位置づけられる三愛塾運動の歴史的な一面をまとめる。

酪農学園大学の前史には酪農義塾や野幌機農学校があり、黒澤酉蔵のリーダーシップによって、農業、特に酪農業に特化して北海道各地方の中堅農村青年の育成に力を注いでいたことがうかがえる。戦後の酪農学園大学は、黒澤酉蔵の理念を基本的に継承しながら、北海道大学や帯広畜産大学との住み分けを図り、農業従事者、実践者の育成を図った。また、近年では農業を含む自然環境の問題を意識し「新循環農法」を提示するなど、新しい取り組みが見られる。さらに、酪農学園大学史の中では、積極的な位置づけはみられないが、三愛塾運動の実践も看過することができない。初代学長に就任した樋浦誠を中心に大学を開放し、地域を支える農民を「無知から解放」した。その実践は単に大学の知的、人的資源を開放するにとどまらず、その資源を生かしながら「農民がいかに生きていくか」という主体的な力量の形成に貢献してきたのである。以下、その詳細を明らかにし、最後に成果と課題をまとめる。

1.　黒澤酉蔵の生い立ちと酪農学園大学の前史

黒澤酉蔵氏（以下、敬称略）は酪農学園大学の創始者と同時に、株式会社雪印乳業の創始者でもある。戦前から衆議院議員としても活躍している。戦後は北海道知事にも立候補、落選こそしているものの北海道農業、特に酪農業の礎を築いた政治家である。

黒澤は 1885 年 3 月、茨城県久慈郡矢世村（現、常陸太田市）に生まれた。14 歳で上京し足尾銅山鉱毒事件を知る。「災害地学生視察団」、「学生鉱毒救済会」に加わり当該農民の救済運動を展開した。黒澤が師事した田中正造は、侵略戦争ではない形で国を繁栄させるためには、治山治水と国土の尊厳を守るべきとの信念[1]を持っていた。黒澤が田中を師事したのはわずか 4 年間であったが、「個性がつちかわれ、愛と正義の精神が高められ、不屈の精神が養われる」[2]とあり、その影響は多大であった。

黒澤が北海道へ渡ったのは 1905 年、21 歳の時であった。その動機は母の死である。黒澤の家は小作農で決して豊かではなく、父親の収入も不安定であった。家計を担っていた母の死によって、幼い弟、妹の面倒は自分が見なくてはならなかった。思い悩んだ黒澤は一大決心の末、新天地北海道へ向かうことになった。渡道後、札幌で酪農業を営む宇都宮仙太郎[3]に出会う。牧場に出向いた黒澤は宇都宮の生き方[4]に惚れ込んで牧夫になることを

---

[1] このような信念の一部は、後年の黒澤が提唱した「農民道五則」の循環農法にも受け継がれている。

[2] 学校法人酪農学園『酪農学園史』1980 年 18 頁

[3] 「酪農の父」と言われている。1887 年に渡米し、ウイスコンシン州農事試験場で働きながら州

決意した。牧夫となってから 4 年後の 1909 年にキリスト教の洗礼を受けキリスト教徒となった。同年には佐藤善七[5]の紹介によって、山鼻東屯田村 19 番地（現在、札幌市内南 10 条西 8 丁目付近）に黒沢牧場を興した。1915 年に瀬尾梅江さんと結婚。二人三脚で働き「超人的な労苦の生活を堪え忍び、貫き通してこられた」[6]と評する文言も見られる。

以上のように酪農業に従事していた黒澤だが、1923 年に「北海道蓄牛研究会」を宇都宮仙太郎、佐藤善七らとともに発足させる。牛乳は今ほど需要がなく、過剰牛乳を加工する技術もなかったために処分されていたが、牛乳を処分するか否かは煉乳会社に支配権があり、酪農民はそれに従うしかなかった。この事態を打開するために蓄牛研究会が作られたのである。また、黒澤は宇都宮仙太郎を経由して[7]デンマークを模範にすべきとする教えを受けていた。そこで研究会ではデンマークをモデルに農業技術や農村の生活、組合制度等の研究が重ねられた。

1923 年に発生した関東大震災を契機に、研究会のメンバーは零細な出資金を募り約 5,000 円を集め、営利本位でなく売り先を失った牛乳を買い取り加工する組合事業を開始する。それが有限責任北海道製酪販売組合[8]（以下、酪連）となる（1925 年創立）。

酪連の事業が軌道に乗り始めた頃、黒澤は農民教育の必要性を感じていたといわれている。特に酪農の指導者養成が組合活動を続けていく上で必須の課題であったし、冷害によって凶作となる年もあったことから寒地に適した農業を研究し、普及させることが課題であった。宇都宮仙太郎、佐藤善七ら北海道酪農の先駆者であり、かつ酪連のメンバーを理事として、黒澤自らは塾長となって 1933 年に社団法人北海道酪農義塾（以下、義塾）を創設した。「北海道酪農学校（酪農義塾）設立趣意書」[9]には、「…如何にして酪農業の経営を普及しこれを合理的ならしむべきかといふこと」について協議され、「本道には諸種の農事指導機関が設けられ、農学校其他の教育機関も亦備はつてゐるが、この農業経営の核心をなし、農村更生の心髄ともいふべき酪農業に関する指導殊に教育に関する施設に至っては未だ何等の見るべきものがない」という理由から創設された。修業年限を 1 年とし、酪農科と製酪科を設置した。義塾の教育理念は中堅農村青年に対して行う農民としての確固たる人生観の確立であり、教育目標は立地条件に適応した寒地農業の理論とその方法技術

立大学の短期コースで学び酪農に必要な見識を深め帰国。北海道に酪農業を広める。

4 宇都宮の言葉に「三徳」がある。三つの徳とは「第一に役人に頭を下げんでもよい。第二にウソを言わんでもよい。第三に牛乳を飲める。人にも役立て、自分の身体が良くなり、国民の健康を良くする」（青山永著『黒澤酉蔵』黒澤酉蔵伝刊行会 1961 年 59 頁）を指す。黒澤は宇都宮の「三徳」に心を打たれ牧夫になることを決心したという。

5 山鼻地区の名望家で自助園というりんご園を経営していた。長男は佐藤貢。後の㈱雪印乳業社長。

6 学校法人酪農学園『酪農学園史』1980 年 78 頁

7 宇都宮が留学していたウイスコンシン大学がデンマーク農法を理想としていることを知ったため、デンマーク農法の研究を重ねた。「地力低下、冷害などで低迷している本道農業を発展させるには、同じ寒地根ざし有畜畑作を体系化したデンマーク農法を導入する以外にない」（北海道新聞社編『人脈北海道 農業編』昭和 51 年 北海道新聞社 75 頁）という信念を持った。デンマーク農法の提案は黒澤酉蔵、深沢吉平、佐藤善七、佐藤貢らに影響を与えた。また、酪農家を公費でデンマークへ派遣させるなど、従来のアメリカ型、本州で行われていた酪農と違う側面を見せた。

8 ㈱雪印乳業、酪農学園大学の実質的な母体となる。

9 学校法人酪農学園『酪農学園史』1980 年 所収

の体得と自家経営、隣保相助の実現であった。さらに黒澤自身が体得した農民観を「農民道五則」にまとめた。酪農科では酪農民養成を、製酪科では酪連の製酪事業従事者の育成を目的とし、酪連関係者も黒澤の義塾教育を受けた。また、酪農義塾の記念事業として冬季学校を開設した。冬季学校も寒地酪農業の確立と自営酪農民の養成という目的があった。実学中心で地方農村青年を対象にして農閑期の短期集中教育を展開したことに特徴がある。義塾、冬期学校ともに入学者は農業に従事者している地方の中堅青年（町村長、農会長、青年学校長の推薦による満 17 歳以上 30 歳以下の男子青年）と限定した。

ところが、義塾教育が軌道に乗り始めた矢先に戦局が悪化した。それに伴い農村の生産体制も悪化した。この事態を解決すべく農村の新しい生産体制を模索し始めることになる。1941 年に黒澤は新生産体制を有畜機械化農業と考え、体制確立の第一歩として指導者養成機関設立を決め、翌 1942 年に実業学校として甲種農業学校興農義塾野幌機農学校（以下、機農学校）を設立した。修業年限は 3 年、定員は 360 名であった。初年度は設備等の関係から 80 名の入学があった。開校初年度に限り入学生は授業料も食費も必要なく、農場で働きながら学んでいた。義塾に引き続き生徒は寮生活であった。また、実業学校であるために教育方法も特殊であった。教室はなく作業現場が教室であった。得られる知識は文献からではなく作業からであった。戦時中は機農学校の成果をみることはできなかったが、戦後は学生が復員、帰村したことによって、各村には作業を通して得られた実践的な知識、技術を持つ多くの若者が活躍した。

冒頭にも述べたように、黒澤は様々な「顔」をもっているためにその評価は難しい。しかし、教育に関していえば、酪農業を北海道の基幹産業として位置づけるために、農民育成、特に中堅青年の育成に尽力した。教育理念には黒澤自身の体験をベースに「農民道五則」を示した。戦前の義塾と機農学校の特徴は、黒澤の理念や目的に見られる「自営酪農民の養成」と「寒地酪農業の確立」といえる。また、以上のような特徴は戦後酪農学園大学の教育理念にも継承されている。

2. 戦後酪農学園大学の変遷

終戦後、黒澤は日本復興を酪農再生に置き、教育理念には実績のある実学教育と新たにキリスト教精神[10]をベースにした人格教育を掲げ、酪農大学設置を決意した。ちょうどそのころ東京では日米の共同による総合大学の建設案が浮上していた。この案は後に教養学部のみの単科大学として設置された国際基督教大学（ICU）となる。キリスト教精神を掲げたことから、理念上共通する点もあったため、黒澤は自らの酪農大学を総合大学農学部として設置するという構想を目論んだ。しかし、財政面での折り合いがつかず、総合大学設立は困難と判断されたため、黒澤の農学部構想はここで頓挫した。しかし農学部構想の頓挫は大学設立の頓挫ではなかった。北大農学部出身、岐阜高等農林学校（現、岐阜大学農学部）の教授職にあった樋浦誠に学長就任を要請し、講師陣を北海道大学、帯広畜産大学から召集、機農学校を大学へ昇格させるためにキリスト教団体から寄付金を集めた。しかし、人的環境は揃いつつあったものの、物的環境がほとんど整っておらず、大学の設置

10 黒澤は 1909 年に洗礼を受けキリスト教の信徒となっている。戦前は強調することはなかったが、戦後はキリスト教精神、三愛精神（神を愛し、人を愛し、土を愛する）について度々言及している。

基準を満たすことができなかったために大学設立には至らなかった。そこで、第一段階として 1949 年 7 月、酪農学園大学部を各種学校として設立させた。翌 1950 年 3 月には短期大学制度が暫定的に出来たことから、大学部は短期大学（酪農科）へ昇格させた。そして、短大設立から 10 年後の 1960 年に念願であった酪農学園大学（四年制）が設立されることになる。

短期大学の変遷をみると、10 年間酪農科のみであった学科が、1962 年に製造科を開設した。1964 年には酪農科を 1 コース（全日制)、2 コース（季節制）に展開し、農閑期を利用して学習できるコースを開設した。1985 年には酪農学園短期大学を北海道文理科短期大学に校名変更し、教養学科を開設した。また、1990 年には経営情報学科を開設している[11]。近年では 1998 年に北海道文理科短期大学を酪農学園大学短期大学部に校名変更するとともに従来の酪農科を酪農学科に学科名変更を変更した。酪農短期大学の創設は、四年制大学創設のための暫定的措置という位置づけではあったが、季節制を導入するなどユニークな試みが見られ、特に各農村地域の中堅指導者の養成という役割を担った。教養科、情報経営科の創設など酪農に特化することなく学科を開設してきた。

酪農学園大学は 1960 年に酪農学部酪農学科から出発、創設以降は 1963 年に農学部農業経済学科、翌 1964 年に酪農学部獣医学科を開設し規模を拡大した。北海道大学、帯広畜産大学が農学、獣医学などの学部を持っているが、研究機関としての色彩が濃く地域社会に入り込む人材を養成するという目的意識はあまり見られない。これに対して酪農学園大学は研究というよりも、地域で酪農業を営む人にとって必要な人材の養成に重点を置いた。1975 年には大学院獣医学研究科獣医学専攻（修士課程）を設置し、より高度な見識をもつ獣医の養成を目指した。1981 年には大学院獣医学研究科獣医学専攻（博士課程）を設置と大学院酪農学研究科酪農学専攻（修士課程）を設置した。1988 年には酪農学部食品科学科を開設し、酪農製品の加工、食品、栄養など酪農産物の教育と研究に着手した。1990 年代からは大学院の拡充が行われている。1991 年に大学院酪農学研究科食生産利用科学専攻（博士課程)、1994 年に酪農学部食品流通学科、1995 年に大学院酪農学研究科フードシステム専攻（修士課程）が設置されている。酪農学部獣医学科は改組され、1996 年に獣医学部獣医学科となった。さらに、黒澤の「農民道五則」の中に示されている「循環農法」を現代風にアレンジし、「新循環農法」として提示し、温暖化やリサイクルなど環境をめぐる地球規模の問題に対応するため 1998 年に環境システム学部経営環境学科、環境システム学部地域環境学科をそれぞれ開設している。

3. 三愛塾運動史

1950 年 8 月 6 日、酪農学園短期大学が創設された年に同短期大学の初代学長、樋浦誠氏（以下、敬称略）の呼びかけによって始められたのが三愛塾運動である。戦後初期の北海道を舞台に大学を開いた実践でもある。酪農学園大学の歴史の中でもこの運動を看過することはできないだろう。運動は野幌から道内へ、全国へ波及し、農民の自己教育や主体形成に貢献することになった。紙面の都合上、断片的ではあるが大学開放の歴史を記す。

[11] 製造科は 1972 年 3 月に、2 コース（季節制）は 1984 年 3 月に、教養学科および経営情報学科は 1999 年 12 月にそれぞれ廃止されている。

1950 年 3 月、野幌機農高等学校の通信教育誌『酪農学校』に「酪農青年に告ぐ」[12]と題したメッセージが掲載された。このメッセージは酪農短期大学初代学長樋浦誠が執筆した。樋浦は農村を立てなおす第一の方法は「無学」であることの自覚であると唱え、「無知からの解放」を訴えた。

「…今や、日本の社会には大学が氾濫して居る。新制度の大学は従来の大学よりも或る意味で程度が低い。大学の教養はむしろ、昔の中学の教養に接近して居るところがある。数年後には大学卒業者が都会にも、田舎にもあふれ出るであろう。大学程度の教養を身につけて置くことは、今後、二十年の将来を考えても甚だ大切であることは自明の理である。新しい農村の指導者として大学程度の教養を身につけて置くことも今後は有用であろうと思われる。正規の大学を卒業することが出来なくても、大学程度の教養を身につけることは必ずしも至難のことではない。我々は酪農大学の通信教育を考えて居るし、酪農大学の移動（出張）講座も考えて居る。…定時的な大学の塾教育も計画している。この計画の中には男子部の外に女子部も必ず設けたい。農村を愛し、田園生活を賛美し進んで農村青年に嫁いで行く底の頼もしい乙女の社会教育を是非とも実現したい。また農村に於ける健全な娯楽のために、音楽（日本並びに世界の民謡を含む）や演劇（舞踊、体操を含む）の普及をも考慮して、我々の大学塾では学問、宗教、芸術の立体的な修業を念願して止まない。賛成者はないか！…農事が多忙でナカヽヽ遊学し難い農村の実情に私は心を痛め、心を悩まして居る。何時がよいかしら期間を何ヶ月にしたらよいかしら。知らせて下さい。どんな提案でも大いに耳を傾けて聞きますから御知らせ下さい。申し出があれば、私自ら出かけて諸君と相談することも或程度まで可能である。（以下、省略）」

この言葉が農村青年に行き届いた。その後、三愛塾の具体的な募集要項が掲載された。要項は当時としては画期的であった。酪農業を営む青年にとって大学レベルの酪農や農業を学ぶ機会がなかったし、たとえそのような機会があったとしても、1 年間を通して教育機関に通学することは不可能であった。農村の復興が声高な時代であっても、復興策が模索されている時代であり、酪農家や農民、そして農村にとって最大の働き手である青年を教育機関に通学させることは、その必要性はあったにせよ、農家の人手不足に直結する問題であった。その意味でわずかな農閑期を利用した短期の大学教育は画期的であったのである。

これら樋浦の呼びかけと募集要項に応じて集合した第 1 回三愛塾の参加者は 31 名。学習内容は、酪農に関する専門的知識と技能の教授が行われたほか、協同組合、歴史、法制、農村社会の生活環境に関する講義、社会科学分野、芸術の講義が行われた。また、体験発表や座談討論会もあり、夜を徹して話し合ったことも機関誌『三愛』に記されている。三愛塾運動の特徴は、自然科学分野、酪農に関する技術的側面だけを開放するのではなく、それらに加えて、教養、社会科学、芸術といった学問も開放したことである。農村青年の意識改革が農村社会の変革につながるという目的の下、新しい酪農、農業のあり方や自分の生き方を問うたことが、同時期に道内各地で盛んに行われていた農業講習会と比べても全く異なるユニークな点である。

1950 年に開催された三愛塾運動は草創期から農村青年へ浸透し、発展期へと移行する。三愛塾が発展したという理由は 2 点ある。ひとつは草創期三愛塾運動の参加者、酪農短大

12 樋浦誠「酪農青年に告ぐ」『酪農学校』野幌機農高等学校編 1950 年 3 月号

の卒業生が各地へ戻り、それぞれの農村に「三愛友の会支部」を結成したこと、もうひとつは三愛塾の機関誌『三愛』を創刊したことである。友の会は各地の酪農民、農村青年を対象に「横のつながり」を形成した。また、機関紙は三愛塾参加講師による農業、酪農に関する専門的なアドバイスが掲載され、通信教育的な側面も持った。これらはすべて三愛塾運動の発展期と位置付けることができる。

また、支部の結成は各地に三愛塾運動を展開する礎となった。それぞれの地域で酪農短大、酪農大学出身者あるいは三愛塾運動の参加者がリーダーとなって、樋浦や酪農大学の講師を呼び、各地で三愛塾運動が開始された。1964 年に樋浦が学長から解任されることになるが、それ以後も三愛塾運動が継続されたのは各地で支部が結成され運動が展開されていたためである。道内（一部道外）では、十勝三愛塾（1955 年）、阿蘇酪農塾（1957 年）、中標津三愛塾、北桧山三愛塾（1958 年）、道北三愛塾（1961 年）、瀬棚三愛塾、農村女子三愛塾（1965 年）、北見三愛塾、日高青年塾（1966 年）、岩手三愛農村塾（1970 年）、上富良野三愛塾（1975 年）で行われた資料が現存している。

現在、三愛塾は道北三愛塾（年間 2 回）、上富良野三愛塾など一部の地域で年 1 回のペースで行われている。一時期運動が隆盛した 1960 年前後に比べると「三愛友の会」の力が弱くなり、活動こそ継続しているものの、勢いがなくなったところもある。しかし、野幌での三愛塾ができなくなってからは道北（名寄）にある「道北センター」が軸になって現在まで活動が続けられてきた。道北三愛塾は「道北三愛塾実行委員会」を組織し毎年活動を継続している。近年の特徴として挙げられるのは、農業の技術的側面の学習が後退した一方で、先駆的農業を営む農家へ見学に出向くなどの体験的な学習が見られる。また、離農や後継者問題と連関して、これからの農業をどのように伝えていくか、「横のつながり」に加え、世代間の「縦のつながり」をテーマに開催されている。さらに身近な農業問題に加え、カナダの農民との交流を通じて行われる貿易、商業問題を考え、話し合うことも道北三愛塾の特徴となっている。

おわりに

ここで本稿の成果と課題を若干考察したい。成果として、酪農学園大学はその前史から現在まで「北海道における農民育成」を常に意識していることがわかる。創設者である黒澤酉蔵らを中心に展開した酪農学園大学の前史、戦後から現在までの酪農学園大学の変遷に見る特徴、初代学長樋浦誠が戦後初期から始めた三愛塾運動の実践は、そのいずれも如何にして農民育成を図るかという点に力点があることが明らかになった。また、三愛塾運動は全国的に見ても、大学開放の先駆的な取り組みであった。

酪農学園大学は今後も大学の研究機能に特化されず、これまで果たしてきた農民育成という教育機能をどのように維持、継続させるかが課題となるだろう。

本稿では酪農学園大学の一面的な歴史しか描くことができなかった。今後は地域社会の構造的分析をすすめていくことが課題となる。